

中 道 — 真実の智慧と実践 —

中道とは何か

中道の基本的な意味は、物事がすべて因縁によって生滅するという仏法の正しい智慧に基づいて、「苦楽」「有無」「断常」等の物事の両極端にとらわれず常に不二中道を歩むということです。古い経典（修行道地経）の中に、仏法の中道に関する次のような「鳥の譬え」があります。

ある王宮で毎日のように多くの鳥が捕らえられて、その中で大きく太ったものから順番に食膳に供されていました。その中の一羽の鳥がこの様子を見て、心中密かに「自分も余り食べ過ぎて肥満になれば、必ず殺されて食われてしまう。とは言っても食わずにいては死んでしまう。どちらにしても死からは逃れられない。とにかく今のままで、できる限り長生きをするために、ほどよい節制をして適量を食べることにしよう」と考えたのです。

その賢い鳥は、その日から直ちに適切な減量を実行しました。その結果、自分の体がちょうど鳥かごの網の目を通り抜けるまで痩せたため、そこから大空に飛び出して自由になることができたといいます。（趣意）

私たち凡夫も、往々にして自分の置かれた危機的状況を正しく理解できずに、目先のことだけに固執するような愚かな鳥のように振る舞うことがあります。現実の問題として、私たちの中に極端な利己心や執着心がある場合、仏法の中道を実現することは容易ではないのです。

したがって、中道の智慧をもって我が身を照らし、物事に対する両極端を反省することによって中道をめざす糸口が見つかるのです。

中道の特長

釈尊は物事の極端な二辺を捨てて中道を悟りました。その中道とは正しい智慧であり、正しい実践であり、正しい真実の姿であると言えます。

仏教において「諸行無常」「生老病死」と説かれているように、私たちの現実世界は静的なものではなく、物事の状態は絶えず変化していきます。

その変化の状況の中で中道を実践するためには、全体を正しく見極める智慧と、そこから正しい解答を選択する批判的な智慧という二つの性格を持った「中道智」が必要です。

また極端な執着を持てば中道智は発揮されませんから、中道智は般若の智慧（空の智慧）も有していると言えます。

以上の点に中道の特長が見られますが、この中道を実践することによって調和のとれた自由自在の境地が得られるのです。

中道の種々の立場

〈苦楽中道〉

釈尊は五人の苦行者に苦楽中道の教えを説かれました。その苦楽中道とは苦行と快樂との極端な二辺を離れた中道のことです。人生の苦楽両方において極端に走ることなく中道の智慧をもって適切な行為をしていけば、苦楽中道の快適な生活を営めるのです。

仏教説話の中の琴の譬え（箜篌の譬え）で、釈尊は苦行者ソーナに次のように説いています。

釈尊「ソーナよ、お前が家にいた時、琴を習ったことはあるか」

ソーナ「はい、習いました」

釈「琴を弾くとき、琴の弦を強く張れば良い音が出たか」

ソ「いいえ、弦をあまり強く張り過ぎては、良い音は出ないものでございます」

釈「それでは、弦を緩めたほうが良い音が出るか」

ソ「弦を緩め過ぎても、やはり良い音はいたしません」

釈「琴を弾くときでも、弦を緩め過ぎず、程良く調子を整えれば良い音が出たというのだな」

ソ「はい、おっしゃるとおりでございます」

釈「ソーナよ、修行も琴と同じことだ。努力が過ぎても執着を生じる。緩め過ぎても怠慢を生じるものだ」

この言葉に、彼はうなずいた。それを見て釈尊はなおも言葉を続けた。

釈「道を求める場合は執着し過ぎず、そうかといって怠らず、緩急かんきゆうのよろしきを得ることこそ大切なのだ」（律蔵大品五・仏教説話大系 二 - 二八六頁参照）

〈有無中道〉

中道は種々の立場から説明されますが、知的な立場からは有無中道が説かれます。釈尊の教えの根底には、因縁（因果）の道理が貫かれています。その仏教の因縁（縁起）説においては、有と無という二辺に偏った見解を排除し、「有に非ず無に非ず」という道理を「有無中道」と言います。有無中道を肯定的に表現すれば、有と無の両面を持ち合わせているとも言えます。

例えば、私たちは有に執着をして、自分の若さや財産がいつまでもあると思っていますが、それらの存在は壊れやすいもので、あるように見えても固定的実体としてあるのではないのです。そのことは老死に直面すれば誰にでも理解できることです。

また一方、無に執着をして有無中道の無を、虚無の意味にとらえることも誤りです。それでは虚無主義おちいに陥ってしまい、真実の智慧とはなりません。

世間の物事は因縁和合して存在していますが、そこには有と無の両面の性質があると正しく見通すことが有無中道の教えなのです。

〈八不中道〉

インドの論師である竜樹は、釈尊の説いた中道の意味をさらに、不生・不滅・不常・不断・不一・不異・不来・不去の八不中道によって示しています。この中の不生・不滅について言えば、現実の生滅の世界がそのまま不生・不滅の世界であると見極めるのが八不中道の教えです。

例えば、植物の種を土に蒔いたら芽が出たといいますが、芽が出たときには既に種は水分と栄養を吸って芽に変化しています。ここでは芽から見れば「生じた」ことになりませんが、同時に種から見れば「滅した」ことにもなるのです。つまり「生」「滅」のどちらかに偏った見方をすれば、種と芽との関係でも判るように、物事の不生・不滅の中道の姿をとらえることができないのです。

このように八不中道の教説も、不生・不滅等の八不の立場から中道の一面を正しく説明しているのです。

法華経の中道

以上のように、中道の意味を種々の立場から述べてきましたが、法華経で説く中道とは、諸経で扱う部分的な中道ではなく、仏法の中道の全体を明らかにした円融三諦の中道のことです。

天台大師は『摩訶止観』に、

「譬えば明鏡の如し。明は即空に喩え、像は即仮に喩え、鏡は即中に喩う。合に非ず散に非ず、合散宛然なり」（摩訶止観弘決会本 - 上 二〇五頁）

と円融三諦を説明しています。

つまり、鏡があらゆるものを映し出すのは空諦であり、鏡に映る万物の像は仮諦であり、鏡それ自体は空諦も仮諦も具足した中諦（中道）であると説いているのです。

天台大師は、法華経の円融三諦の上から、凡夫の心を対象とした観心修行を説き、凡夫の心の中にある真実中道の理を妙法と見なしたのです。



しかし末法の私たちは、凡夫の心を対境とする天台過時の観心修行をしても、妙法の功德を得ることはできません。末法の観心は、御本仏の御当体たる大御本尊を直ちに信じて下種の題目を唱えることです。

大聖人は『御義口伝』に、

「一とは中道、大とは空諦、事とは仮諦なり。此の円融三諦は何物ぞ。所謂南無妙法蓮華経是なり。此の五字は日蓮出世の本懐なり、之を名づけて事と為す」（御書 一七二九頁）

と仰せられ、法華経『方便品』に諸仏出世の本懐を一大事因縁と説きますが、その本義は空仮中の三諦を円融相即した本門の大御本尊にあると教示されています。したがって、この大御本尊を根本とした中道を拝する修行こそが、正しい成仏の道となるのです。